

※この作品はHFルートのアフター妄想話です。

セイバー分がなくて  
ごめんなさい。

春、三月下旬から四月にかけて降り続ける冷たい雨のことを菜種梅雨という。寒々とした雨など普通は歓迎できないものだが、この雨が降る頃になると菜の花が咲き始めることからこう呼ばれている。(春雨の冷たさすら春の喜びのひとつにしてしまうとは。この国の先人たちはよほど春が楽しみだったのでしょうか)

降り続く雨を眺めながら彼女、ライダーは本の間にしおりを挟んだ。

冬木市に春が訪れようとする頃、衛宮邸はにわかに着きを失う。衛宮士郎は普段よりも多くの食材を買い込むようになるし、間桐桜はカレンダーをチェックすること頻繁になる。

ただひとり変わらず居間で茶をすすっているのはライダーのみであり、普段はマイペースを崩さぬあの藤村大河でさえ、こうして早朝から居間にやってきた。

「おやタイガ。おはようございます」

「ふあああ…おはよう、ライダーさん」

「はい、今日は早いのですね？」

大あくびをしながらやってきた大河はいかにも眠たい、といった様子。それもそのはず、普段彼女が起きてくるのはこの家で一番遅く、今はまだ士郎も桜も起きてきてはいない。

「士郎たちは？」

「まだ床の上かと」

「そっか。まあこんな時間だもんね」

大きく開け放たれた縁側からは陽の光が差し込んでいるものの、その角度はずいぶんと水平に近い。

「それにしても今日は晴れて良かったわねえ」

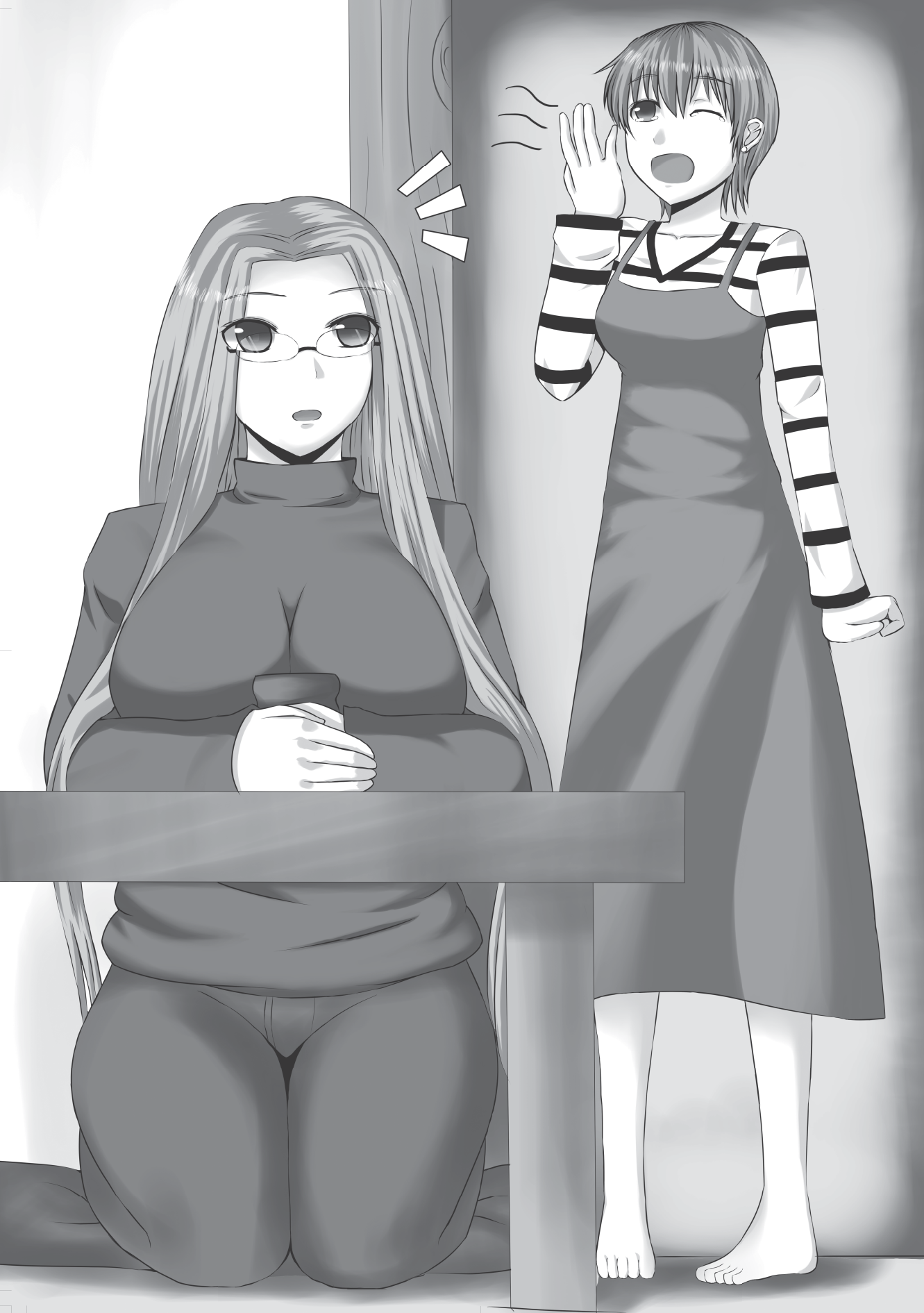
良かった良かったと自身で返しながら大河はあぐらをかいて座る。年頃の家主がいる家とは思えない態度だが、これが彼女なのだ。

「ここ数日雨が続いていましたからね。これもリンの日ごころの行いでしょうか」

「つていうよりも遠坂さんには雨とか曇りって似合わないものねえ。そのせいじゃないかしら」

「フフツ、確かに…」

同意して彼女は凜のことを思い浮かべる。小細工が嫌いでもいつもまっすぐな彼女の輝きは、自らのマスターの漆黒すらも打ち払った。





そんな彼女に悪天候が似合うだろうか。

「さて、それではでかけてきます」

ライダーの知覚はまどろみから目覚めた桜と士郎を既に確認している。マスターたちと朝の挨拶を交わすまで待つても良いが、どうやら彼女も気が急いでいるらしい。

「あらら、迎えにいくの？」

そう、本日遠坂凜は留学先のロンドンより帰国する。大河がこんなに早く起きてきた、いや、眠れずに徹夜をしたであろう理由もそれだ。

「はい、あの二人を放っておくところらへの到着が遅れてしまうかもしれないので」

「うわさには聞いてたけど、もうひとりの子っていうのも、凄いいないね」

「ええ、それはもう」

凜、そして冬にロンドンで出会った若き魔術師のことを思い出すと、つい顔が緩んでしまう。

「遠坂凜と正面から対峙しようと思う人間など、この地球上を探しても彼女だけではないでしょうか」

「あら、そうなると士郎が大変そうね」

「胃腸薬必携であることは間違いないかと」

そう言って少し意地悪く笑うと、ライダーは二号と名づけられた自転車の元へと向かった。